

千里の鳥・万博の鳥(第89回)「シメ」(2020年4月)

シメは体がずんぐりしていて、大きな嘴の形をもち、見ただけで力強く、硬い餌を噛み砕く能力の高さをうかがわせる鳥である。このため、マヒワ・アトリ・ウソ・イカル・ベニマシコなどが、色が美しい群での飛翔が素晴らしいことから、人気の鳥が多いアトリ科の鳥なのに、シメは灰褐色で見栄えのしない地味な鳥である。

そのシメが今月の写真では、イロハモミジの新緑に点々ちりばめられた赤い小さな花に囲まれた、晴れやかな舞台の中心にいる。シメはこの時、イロハモミジの新芽や小さな花ではなく、昨年の実が残っていたので食べていたとのことである。

このように地味なシメ、バードウォッチャーには変わった特徴を持つことで、親しまれている。その一つは嘴の色の変化、冬鳥として北国から大阪近郊に渡来したばかりの12月、シメの嘴は肌色であるが、春の繁殖期が近づき渡去前の4月になると、写真で見られるように鉛色の嘴に変化している。

また一般に鳥の羽(風切羽)は、閉じた時に先端が丸く見えるが、シメの風切羽は先端が切り取られたように角ばった形である。この角ばった風切羽を持つことで、シメにどんなメリットがあるのか、よくわかっていない。さらに上記に灰褐色と書いたシメの色も、一様ではなく、季節により雌雄により変化しており、シメを深く楽しめる一因となっている。

シメの名前の由来は地鳴き「シー(ツイ)」と、鳥を意味する接尾語の「メ」から、「シメ」になったとのことである。

シメの繁殖地は中国東北部・サハリン・カムチャツカ半島などで、日本(北海道～本州北部)でも一部が繁殖している。万博公園に渡来するシメの数は、年により変化

するが、繁殖地での繁殖成功率の変化か、大阪近郊に来るまでの途中で越冬地を決めたためか、理由はわかっていない。

万博公園など越冬地のシメは、太いくちばしを利用した硬い木の実を食べるが、よく利用する実に写真のイロハモミジがある。それ以外にシナサワグルミ・トウカエデなど堅い実、そしてアキニレ・ハルニレなど柔らかい実にもシメが来ている。

シメは北帰行の日が近づいたこともあり、今の季節は渡去時の栄養補給に余念がない。4月中には繁殖地へ渡去する筈なので、「元気に来年も戻っておいで」とエールを送ってあげてくださいますように。

**** 写真 ****

種名:シメ

撮影日:2019年4月16日

場所:万博公園

撮影者:有賀憲介

探鳥会中止のお知らせ

新型コロナウイルス感染症防止への対応のため、2020年4月～6月の探鳥会を中止いたします。4月は紙上バードウォッチングで「シメ」を楽しんでくださるよう、お願いします。

・日本野鳥の会大阪支部主催

万博公園定例探鳥会 ~~4月11日(土)~~

・吹田野鳥の会主催

万博公園探鳥会+総会 ~~4月19日(日)~~

